

## 【論文】

## 東亜同文会 ——教育者としての近衛篤麿——

愛知大学名誉教授 元愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田 佳久

### 1. はじめに

本論は、幕末の1863年(文久3年)に生を受け、30歳代を中心に新たな明治時代にあつて、東亜同文会を軸に国際、政治、文化、教育、経済など多分野で活躍し、日本の進路までリードし、1904年(明示37年)42歳の若さで多くの人々から惜しまれながら亡くなった近衛篤麿の教育者としての側面をその足跡の中のいくつかのポイントから明らかにしたい。

近衛篤麿(以下篤麿)は、多分野で活躍をしたと上記で表現したが、篤麿はその各分野を独立的に扱ったのではなく、篤麿にとっては各分野を意識的に区分していたわけでもない。関連する各分野を主体的にネットワーク化して対処、対応していったと言う方が正しい。それは後述するように、篤麿は明治時代の日本で制度化されていった学校制度の枠外で育ち、自学とヨーロッパ、とくにドイツでの教育を受けた。今日から見ればマルチで有能な人材として育ったことの背景になったためではないかと思われる。そのためもあつて、最高の門地に生まれた篤麿は、教育分野に強い関心をもち、貴族こそ国家、社会の良きリーダーであるべきだとの考えから、学習院改革を目指したことを基盤とし、さらに東亜同文会活動を中心に国内や東アジアの清国や朝鮮に学校を建て、教育による啓蒙活動を具体化していった。

その点で、篤麿が最も強い関心を持っていたのが教育界であり、それをベースに関連する他の分野へも関心を広げていったといえる。

### 2. 生い立ち

篤麿の生い立ちについては、いくつかの伝記風の刊行物があるが、その中では史資料も裏付けに用いて示した工藤武重による『近衛篤麿公』<sup>1)</sup>が出色のできであり、信用度が高い。そこで以下の篤麿の暦年の確認などはこの書と、『近衛篤麿日記』第1巻～第5巻、および付属文書編(ここではこの編を第6巻として扱う。以下、日記)<sup>2)</sup>も参考にした。

篤麿は前述したように1863年(文久3年)に京都で生まれた。そして1872年(明治5年)、京都の銅駝小学校へ入学している。しか



写1 幼年時代 明治6年頃 (注1より引用)

し、その翌年、すでに 1870 年（明治 3 年）には東京へ移っていた父の忠房がなくなったので、祖父の忠熙の養子になり、もっぱら祖父が父親代わりとなり、篤麿は育てられた（写真 1）。祖父のもと、篤麿は漢学、馬術、弓道などをそれぞれその道の師範によって手ほどきを受け、書道と国風については祖父から指導を受けた<sup>3</sup>。小学校時代は成績優秀で、品行方正、友達ともよく付き合いが出来たという<sup>4</sup>。

そんな中で、遷都の影響で、1877 年（明治 10 年）篤麿は慣れ親しんだ京都をあとにした。祖父も年末にはようやく東京へ移っている。

東京へ移った篤麿は、早速、漢籍や和歌、国文を学び、陽明学にも触れた。その一方、鮫島英語塾に入門し、寄宿舎に居を定め、英語の習得にも励んでいる。その際、工藤の鮫島からの聞き取りによれば<sup>5</sup>、当時の篤麿は必ずしも体躯に恵まれておらず、そこでいつもほとんど毎日授業前には鮫島が篤麿を相手に、相撲を中心に体育に即した運動を行ったという。そのため 17 歳ころには篤麿は次第に体力を身につけた。後に堂々たる体躯を示した篤麿は、日記によれば国技の相撲にも関心を持ち、会場へ出かけ、そのサポートや批評にも熱心になった<sup>6</sup>。この時期の鮫島を相手にした体育のおかげだといえる。

そして、1879 年（明治 12 年）7 月に共立学校へ入学して英語や諸科目を学び、9 月には大学予備門に合格、入学して勉強をした。しかし、翌年の 1880 年（明治 13 年）の春、胃腸の悪化により休学し、静養かたがた、湘南や伊勢、京都、大阪、神戸、大和の奈良、畝傍、吉野、多武峰、倉橋などを巡っている。多武峰では鎌足など先祖を参拝し、京都では詩歌を詠み、旧跡に触れながら、旧臣たちを集め、陽明親睦会を 1881 年（明治 14 年）に創設している。今日の陽明文庫へつながるきっかけになったものと思われる。

こうして大学予備門をやめると、開放されて次第に健康になった。そしてますます自学

で英語力が高まり、さらに独学で諸学も学ぶことで修学が進み、そこに外国留学の夢が生まれた。

なお、この独学を裏付ける史資料に、1879 年（明治 12 年）の 17 歳から約 10 年間にわたって書き留められた『蛭雪余聞』<sup>7</sup>がある。これは人からの聞き書きや書物、雑誌、観察などからの幅広い情報に関心のままに書き綴った記録である。後半にはオーストリア・ドイツでの海外留学期間も含まれており、篤麿の関心事を知る上で大変興味深い。とくに、注目されるのは、その幅広い関心領域である。洋の東西を問わず、倫理から歴史、地理、地名、社会、階層、政治、法律、交通、政治、税制、貿易、貿易品、人物、生物、家畜、食物、農業、牧畜、水産業、工業、職人、商業、物理、数学、科学、人体、人種、医学、美術、文化、風俗、逸話、迷信、賭博、軍事、ヨーロッパの諸事情、生産力、生物淘汰、学術競争など、その好奇心の広がりには驚くほどである。西洋文化が入ってくるこの時代、あら



写2 青年時代 明治 16 年頃（注 1 より引用）

ゆる事象に食いついていくまだ若い篤麿の姿は、まさにエンサイクロペディアの創出であり、現代のウィキペディアの取得だといっても過言ではない。そこには専門性に枠付けされた学校制度には縛られない篤麿の高い自由度が発揮され、若さあふれたエネルギーを感じることが出来る(写真2)。そして、このような幅広さは、篤麿が後に学習院院長として教育改革を進める際にも現れることになる。なお、「螢雪余聞」の第1巻の巻頭記事は、「熊沢先生君子小人ノ解」と題され、まず君子とは、「心の静かで大山のごとし、無欲なるが故に能く静かなり(以下略)一筆者注)」とあり、一方、「小人とは、こころ利害に落入りて、世事に出入りして何となく忙し(以下略一筆者注、)」で始まっている。品行端正な篤麿にとって、まずは自戒の第1条としての記録で、大切に記録したのであろう。

情報を几帳面に記録するこの方法は、このあと10年間続き、莫大な記録が蓄積された。この方法は、仕事が次第に公務に移っていき私的な用件も沢山こなさねばならなくなったときに、新しい形で継承されていくことになる。それがいわゆる、「近衛日記」である。つまり、「近衛日記」は10年間の「螢雪余聞」の発展形として誕生したといえるだろう。

またもう1点、「螢雪余聞」の最終巻では、ヨーロッパ諸国と江戸時代の日本の行政法的・民法的法律の内容と仕組みを、歴史を踏まえながら多彩に記録している。内容もそれなりに史資料に基づいており、充実している。これは、のちに篤麿がドイツのライプツヒ大学で学び取得した学位論文「国務大臣責任論」<sup>8</sup>へ収斂する史資料の整理、さらには学位論文への着想になったと思われる。

### 3. ドイツ留学の時代

英語に自信をつけた篤麿は、欧米留学を望むようになった。その際、習得した英語が生かせるように、とくにアメリカかイギリスへ

の留学を希望し、その計画を具体化しようと太政大臣三条実美や右大臣岩倉具視、宮内卿徳大寺実則らに告げた。しかし、岩倉は米英では、自由民権の思想に染まるのではないかと反対し、君主独裁のロシアへの留学を勧めている<sup>9</sup>。英語の教師であった鮫島はアメリカを強くすすめるなど、留学先を巡って議論が分かれ、篤麿の希望は指導者たちの間でもまれた。そんな折、ドイツの特命全権公使である柳原前輝が帰国し、名門の篤麿が自ら海外を目指すことは国家の興隆の表れだと篤麿の留学を強く支持した。そんな折、篤麿の留学に異論を挟んだ岩倉具視が亡くなり、篤麿の留学は推進されることになった。

その結果、1884年(明治17年)、天皇からの留学が5カ年を限度として留学の勅命を受けた。但し、留学先はアメリカでもイギリスでもなく、オーストリアであった。当時のオーストリアは新生日本の国体と類似する皇帝の国であり、三条たちが危惧する国ではなかった。当時としては、絶妙のバランスのとれた留学先が選ばれたといえる。また篤麿にとって、これまで学習した英語の使える国ではなかったが、ロシア案まで出される中で、篤麿としては勅命により念願の留学が実現できることになりほっとしたということであろう。

こうして、1885年(明治18年)4月18日、篤麿は東京新橋駅から多くの見送り人の中を旅立った。翌日、横浜から同乗する細川護成、西園寺公望らとともにボルガ号に乗船して、まずは香港へ向かった。途中、澎湖島にひるがえる同島を占領したフランス国旗を見て、西洋勢力の東進を実感したという<sup>10</sup>。香港ではフランス郵便船ナタル号に乗り換え、以降、シンガポール、コロンボ、アデン、スエズを経て、6月1日にフランスのマルセイユ着。パリで同乗者たちと別れ、単身オーストリアへ向かい、51日目にイエナの宿泊地リングストラッセに到着している。





図1 ヨーロッパ留学コース (注1より作成)

図1はその行程を示したものである。以上のようにスエズ運河から地中海を抜け、マルセイユ上陸からパリへ到着したあと、以降、篤麿の最初の一人旅が始まる。まずはドイツ語の習得から始まった。目的地のイェナでは公使館付きのケッチェルからドイツ語の入門を、次いで7月には貴族学校教授のフォン・ワーゲンフェルドのもと、農村でのさらなる教育を受けている。その成果として、8月には書店で見つけた小冊子を辞書だけを頼りに全訳を完成するという力を発揮したと言う<sup>11</sup>。そして9月にはドイツのベルリンへ出て、ドイツ特命公使青木周蔵に会い、その後の計画を相談し、学術が高いレベルにあるドイツで留学することに変更し、早速、郊外の私塾でドイツ語だけでなく一般科目の勉強も重ねている。これも篤麿にとって幅を広げ、大いに参考になったものと思われる。

そして、ドイツのボン大学へ入学し、政治学と法律学を学び、ライン教授のお世話になっている。ボン大学在学中はドイツ国内旅行で見聞を広め、ドイツで最初に創設されたハイデルベルク大学を訪れ、折からの500年祭にも参観し、そこで学位の授与に関心を持ったものとも思われる。また、イギリスのロンドンにも出かけ、多くの歴史的建物のほか、植民地博覧会を見学、さらに弟の津軽秀麿、常磐井鶴松を日本から呼び寄せ、スイスアルプスを踏破し、イタリアへも旅をしている<sup>12</sup>。

さらに後にはフランス、パリ旅行やイギリス旅行も行っており、帰国後の篤麿の多忙を見ると、このヨーロッパ留学の5～6年間は、篤麿の人生の中で、最も自由で充実した自分の時間を十分に充電して楽しめた最初で最後のひとときであったように思われる。

しかし、ボン大学へ戻った篤麿は、ボン大学の学生たちには貴族の子弟が多く、裕福なためか酒や遊び事に没頭し、学業をおろそかにしていることに気づき、1888年(明治21年)、ボン大学を退学し、落ち着いて学業に精出している学生が多いライプチヒ大学へ転入している。ここではワッハ教授の指導のもと、諸学科のほか、特に商法学を学び、さらに、国内法や憲法学の研究、ラテン語、ギリシャ語も勉強している(写真3)。諸学科の学びとボン大学からライプチヒ大学への転入は、帰国後の学習院改革と清国留学生を受け入れた東



写3 ドイツ留学時代 明治21年5月 ライプチヒにて (注1より引用)

京同文書院の運営、商法学は南京同文書院と東亜同文書院の開設、および授業科目構想に大きく貢献したであろうし、ドイツの国内法や憲法学はやはり帰国後の政界入りも射程に入れていた筈である。このようにライプチヒ大学での学業研鑽は、帰国後の構想も組み込みつつあったといえるだろう。とくに帰国後、日本における教育への関与は、以上のような体験の中で篤麿の意思の中に強く組み込まれていったものと思われる。

そして篤麿は学位取得を目指すことになり、そのために若干滞在を延ばし、卒業論文を執筆し、1890年（明治23年）ライプチヒ大学の課程を終了した。そして論文試験にも合格し、学位を取得している。（工藤武重『近衛篤麿公』、大日社、38-39頁、1938）論文の研究テーマは日本国憲法の視点から、古代の貴族時代、封建時代、明治時代へと続いた日本政治史の中での「大臣責任論」を明らかにし、指導者の国務大臣たちはいかに責任をとるべきかの原理を幅広い見地から考究した<sup>13</sup>。この論文はドイツ語で書かれた。ドイツへ初めて留学し、そこで初めてドイツ語を学び、短期間でそれを習得した。指導者のサポートがあったとはいえ、ドイツ語の論文としてまとめ、ドイツ語で仕上げたという点は、篤麿の強い決意と努力の賜であろう。この論文は同大学で冊子に印刷され、日本の国会図書館には篤麿が知人に献呈したサイン入りの一冊が所蔵されている。

ところで、この卒論のテーマは、貴族に生まれ育ってきた我が身が、国の指導者としてふさわしい指導力とそれを裏付ける責任の自覚を持つべきだとする理念の原理を実証的に示そうとしたものである。それは帰国後の日本で自らを待ち受けているであろう多様なポジションと期待される役割への離陸準備であったといえる。またそれは留学という5～6年に及ぶ在学経験の中で、ドイツの大学教育の幅広さや自由、ゼミ指導といった日本ではな

じみのない自発的な教育システムへの開眼も含め、まずは日本の教育システムの見直しの必要性を痛感したはずである。

それは早速、帰国後にまず学習院における教育改革への取り組みが始まったことからわかる。

#### 4. 学習院の教育改革

帰国した近衛は早速多くのポストが待っていた。6年間にもなる留学と学位を取得した実績は、多くの関係者に篤麿への新しい期待を与えたことが十分に予想出来る。帰国する1年前の1889年（明治22年）には日本国憲法が制定され、帰国した1890年には帝国議会在が招集された。篤麿はそのような中でまず貴族院議員に選ばれている（写真4）。そして同士の議員団の三曜会（のちの懇話会）に入り、それを組織化、翌1891年には貴族院の仮議長や東京倶楽部副会長に選ばれ、さらに華族会館規則改正案起草委員長にも選ばれている。その一方、政務調査機関としての月曜



写4 貴族院議員時代 明治28年頃

会を組織し、貴族界、政界の改革に意欲を示した。また、東方協会副会頭に就任し、国際的な活動の足がかりも得ている。なお、10月には長男文麿が生まれたが、夫人を亡くし、のち、夫人の妹と再婚している。

そして1895年(明治28年)には宮内庁から学習院長を命じられ、翌年には貴族院議長にも選ばれている。さらに大日本教育会長にも就任し、議会とともに教育界にも強い影響力を与える地位を得たといえる。

学習院長に就任した篤麿は、1896年(明治29年)、学習院の学制改革が天皇から裁可されたことをうけ、早速学習院の改革に乗り出している。まずその裏付けのために、多忙の中、積極的に授業を参観して授業内容の実情を把握する一方、素功の良くない5~6人の学生の素行調査を警視庁に依頼している<sup>14</sup>。それにより、学習院の学生たちが飲酒や遊びに浸っている状況を知り、篤麿が理想とする貴族が日本のリーダーとして活躍すべきとする状況にほど遠い事を知る。そこでその対策として、厳重な風紀取り締まり法を制定することを学制改革研究会に提案し<sup>15</sup>、それが認められた。また、学業についても学習院の学生の不勉強さ、卒業後の進路が定まらないことなどに注目し、科目の幅を広げ、幅広い学習が出来るようにカリキュラム改革を行い、また、卒業後に外務省など国の責任あるポストへ就職出来るための大学科設置と法学専攻の設置なども提案し、のちの1898年には実現している。

話を戻して、1896年(明治29年)、学制改革を進め始めたその直後の10月19日、新聞「日本」が「学習院生徒の悪風儀」と題して記事を載せた。その概略は次のようである<sup>16</sup>。

近衛公爵は学習院長に任命されて以来、同院の学生教育の方法を講じ、皇室の学校として恥ずかしくない華族子弟を輩出しようとしている努力は内外に知られているが、同院の

子弟が世の中の悪風に感染して卑猥の世俗にながれ、アラレもない挙動をしたりしているのを聞くのは忍びがたい。近衛院長は生徒の風儀をただすために先般より学制研究会でその意見を開陳し、委員会で調査中であるとはいえ、学習院学生の具体的な悪行を列举でき、さらに生徒の服装などの同院の調達会計に不始末があることも指摘、まだ挙げたりないほどだとして、学制研究会は、まずこれらの問題を一洗することだ。書くのも忌々しいことだが、同院のためにあえて筆を執ったのだと。

かなり痛烈な批判記事であった。それに対して早速篤麿は反論し、確かに一、二の生徒には世俗に感染した者もいるが、記事については風聞でなく、事実の確認を問いたいと、また学制研究会の委員には関係のないことを主張し、新聞「日本」に行き過ぎの訂正をさせている<sup>17</sup>。しかし、この記事が訂正したとはいえ、悪意を持って拡散させる者もいて学制研究会に影響が及ぶのを危惧し、篤麿は同研究会から脱会<sup>18</sup>、責任をあえて果たしている。篤麿の信念がうかがわれる。

また、そのあと、篤麿が毎日新聞記者への談話で、今日の貴族社会は卑劣、傲慢で、新旧華族が万民の上でなぜ特別待遇をうけているかについてこたえられるものはいない、などという篤麿の談話の内容に各紙がかみついたことを篤麿は日記の中で紹介している。貴族こそ日本政治の牽引車であるべきなのに、現実はその逆に近い事への篤麿の率直な談話であった。本人はその反響に期待し、いわば貴族論を議論をしに来てほしいとしている。学習院改革はその基本の第一歩であり、のちには学習院だけでなく、一般小学校の改革や文盲になってしまう不就学児童への扶助、奨学金のあり方などにもそのような観点から発言している。ドイツ留学での経験や知見が一層その裏付けになったと思われる。

以上のような院外からの発言に対応し、篤麿は直接に生徒たちに呼びかけている<sup>19</sup>。同



年 9 月 11 日の始業式での事であった。それは次のような内容であった。

- (1) 学習院教育の主旨をふまえ、規則を守ること。
  - (2) 高潔の志を持ち、野卑な事をせず、徳義を重んじて実践すること。
  - (3) 礼儀秩序を尊び、子弟関係を厚くする風習を養うこと。
  - (4) ともだちを選び、互いに切磋琢磨すること。
- そのほか具体的に本院所定の制服を着用すること。ベースボールなどの学校遊戯が広まりつつあるが、度を越えず勉学にもちからをいれる事。また通学に自転車も流行しつつあるが、生徒の遊具としては高価であり、からだへの影響も心配されるので、なるべく利用しないように。そして華族として武芸や道徳を修め士道を守ること。などを説いている。

そこには篤麿が抱く藩閥政治や誕生したばかりの政党政治への不信感の中で、なんとしても貴族の質的レベルを上げなくてはならないとする強い信念が表れ、新聞による学習院批判をクリアしたい思いがあったといえる。それは同時に、篤麿の貴族への痛烈な批判への衝撃を受けたであろう生徒の父兄たちへの啓蒙でもあった。

篤麿は、多忙な仕事の中、時に京都へ里帰りすることもあった<sup>20</sup>。そこでは近衛家の文書の整理をめざし、今日の陽明文庫の基礎を作ったほか、誕生したばかりの京都帝国大学への史料の提供も行い、同大学との関係が生まれている<sup>21</sup>。同大の総長高根義人はドイツの大学をモデルにして、学問の教授だけでなくその研究が出来る大学を目指そうとした。そのためには選挙制、独立的研究、授業内容や転学の自由、そしてゼミの実施などを実践した。それは東京帝国大学が官吏養成に特化した方向とは大きく異なり、篤麿はドイツでの経験からこの京都帝国大学の総長高根の方式に賛同し、学習院の教育改革に参考になっている<sup>22</sup>。

いずれにせよ、篤麿はドイツのライプツヒヒ大学で世界最先端の教育を経験し、それを踏まえ、学習院での改革、京都帝国大学での実験的改革を体験して篤麿の中に教育世界を作り出したといえる。それは次に、東京同文書院から南京同文書院、そして東亜同文書院の設立へと東アジアの教育にも関わることになる。

## 5. 日清貿易研究所と東亜同文会の結成

### (1) 日清貿易研究所と荒尾精

ところで、以上のように学習院改革に力を注いだ篤麿が学習院の院長に就任したのは、日清戦争が終了する 1894 年（明治 27 年）、4 月の直前であった。実質的には戦争状態は終わっていた。この日清戦争は江戸時代以降の日本にとっての初の国際戦争で、急速な西欧化による近代化を進めた日本が、西欧列強に浸食された清国に勝利した戦争であった。それはその後の日本の進路を決めていく契機となったが、篤麿にとってもいくつかの新しい状況が生まれていた。

一つは、それより前、荒尾精が 1890 年（1823 年）に設立した日清間の貿易実務者を養成し、日清間の貿易を実施することで欧米列強に対する経済的抵抗力をつけようとした日清貿易研究所という名の日本初のビジネススクールを設立したことがあった。授業科目は清語、英語、商業地理、支那商業史、簿記学、商業算、商務実務、貿易論、法律学、和漢文学、ほかなどの貿易用カリキュラムで、荒尾の 3 年近くに及ぶ清国での準備調査とそれを親友である根津一に編集させた『清国通商綜覧』<sup>23</sup>のヒットが反映していた。また当時としては先進的な商品陳列所とそこでの実習制度を設け、苦しい財政に対応しながらも、さらに亜細亜協会を設立し、亜細亜貿易研究所も付設して、広く亜細亜からの学生も受け入れようとする画期的な構想も持ち、初の具体的なアジアへの視点を実践しようとしてい

た。しかし、この卒業生は卒業直後に折からの日清戦争により、その半分近くが通訳に採用され、戦場でなくなってしまった。荒尾は落胆し、京都で隠棲生活に入り精神修行をはかりつつ、政府の清国への賠償請求に強く反対し、『対清意見』や『対清弁妄』<sup>24</sup>を世に問うた。しかし、そのあと、1896年（明治29年）南アジア構想を実現するために台湾へ行き、そこでペストにかかり、38歳の若さで急逝してしまった。病床での最後の言葉は「ああ、東洋が、、、」であったという。

この前年は、篤麿が学習院長に就任し、この年には貴族院議長、大日本教育界会長に就任している。帰国した篤麿は1891年（明治24年）に清国だけでなく、南アジアでの列強の進出を阻止するための情報収集に東方協会を組織している。荒尾との間に直接の接点はなかったが、荒尾の実践と構想を受け継ぐ人物として篤麿が浮上する状況になったことは間違いなかった。

## (2) 東亜同文会の誕生

日清戦争の勝利は、それまでの脱亜入欧路線に加え、清国を中心にアジアへの関心を高め、前述の東方協会は日清戦争に勝利すると日清関係に関心が集中し、そのため前述の東方協会の会員数は減り、一気に弱体化した。そしてそれに代わり多くの政治集団が結成された。そのような中で、東亜会と同文会がリードした。東亜会は1897年（明治30年）に清国を巡る時事問題に積極的に議論し、発表する目的で結成された。三宅雪嶺、志賀重昂、陸羯南、宮崎滔天、平山周、内田良平、犬養毅、井上雅二ら多彩なメンバーが中心で、言論による政治的主張に重きが置かれた。そして変革をめざして清国を追われた康有為と梁啓超らもその会員に入会させている。一方、同文会は篤麿が欧米列強のアジア戦略に危機感をもち、「東洋は東洋人の東洋なり」という主義のもと、1898年に結成された。篤麿の言葉は荒尾が最後に残した言葉「ああ 東洋

が、、、」をひきついだようにも思える。大内暢三、中西正樹、白岩龍平、井出三郎らを中心に、荒尾系や日清貿易研究所系の流れの人をまとめている。大きな目的は東亜会とほぼ同じであるが、現地に学校を開設し、清語の新聞や雑誌を発行するなど、現地での啓蒙活動に力を入れ、政治ではなく商工業の発展を議論した点に特徴があった。そこに荒尾の日清貿易研究所の流れが見え、篤麿はその路線を評価したとすることであろう。

しかし、両会は財政難の問題を抱え、政府に援助を求めたが、うまくいかず、最終的には両会が一本化するなら可能性があるということで、両会は話し合いがされた。両会に籍を置く会員も多いことから、両会をあわせ1898年（明治31年）、「東亜同文会」という名称で合併統一することを模索した。そのさい、篤麿は東亜会が認めた康有為、梁啓超をメンバーにすることは、清国側からこの会が警戒されること、政治活動は排除するという同文会の立場を理由に妥協はしなかった。結局、篤麿の意見が通り、会長には篤麿が就任した。となった。その基本的な綱領は、支那を欧米列強から守り、欧米列強が目指す支那の分割を避けるために、「支那ノ保全、支那改善の助成、支那時事の討究とその実行、そして国論の喚起」をあげている。しかし、政府の助成金は多くはなく、長く年間4万円に据え置かれ、そこで同会は政府に頼らず、自立の方策を目指すようになった。支那保全の実務派も多い同文会側からの動きは速く、広く会員を求めるべく、同会の設立とともに機関誌『東亜時論』を刊行、のちに会員制の『東亜同文会報』へ移行し、1,300人以上の会員数に達した。

図2はまだ初期の1902年（明治35年）における国内の会員数の道府県別分布を示した。お膝元東京が最多であるが、次いで篤麿の出身地京都を中心に関西地方が多く、あとは広島、福岡、熊本などの西日本に多い。篤麿の





図2 東亜同文会会員の都道府県別分布 (1902年12月) (『東亜同文会報告』第38回より作成、藤田原図)

藩閥政治嫌いが影響していたためか、元薩長土肥の藩の各県は目立たない。また同年における外地の都市別会員の分布を見ると朝鮮に多く、うち釜山、仁川、漢城（のち京城）、木浦などの都市に集中している。清国では上海、北京、天津、漢口、広東、福州に広がっている（図3）。そのほとんどは日本人であるが、朝鮮人は9人、清国人は26人を数え、そのほかペルシャ人が30人、トルコ人2人で、



図3 外地における東亜同文会会員の都市別分布 (1902年12月)



図4 東亜同文会が直接または一部経営した学校と新聞社 (1906年) (『東亜同文会報告』1906年より作成、藤田原図)

篤麿の2度目の世界旅行の訪問地での篤麿に対する評価の影響だと思われる<sup>25</sup>。

また、東亜同文会は朝鮮や清国内に学校を造り、教師を派遣し、新聞発行に着手し、通信員を派遣している。

図4は1906年に東亜同文会が関わった朝鮮、清国での学校の分布を示したものである。朝鮮には直接経営をした6校があり、当初同会は朝鮮での教育向上に力を入れたことがわかる。この動きは清国内上海に東亜同文書院を開設、そしてさらにのちには中学校開校へとつながっていく。但し、朝鮮への多大な関心は同国が日本へ併合されると、学校が制度化され、同会は功績を残しながらも教育の分野から順次手を引くことになる。

そのほか、外地で新聞発行に着手し、通信員を派遣している。図5は1900年（明治33年）から1906年（明治39年）における『東亜同文会報告』中に掲載された情報発信回数別発信地の分布を示した。朝鮮に密度の高いのが特徴的だが、清国内では漢口、長沙、北京などを中心に広域に散らばっており、広い



図5 5～75回の短報発信地の発信回数別分布(1900～1906)『東亜同文会報告』5～75回より作成

ネットワークを形成していたことがわかる。この中には教育情報も多い<sup>26</sup>。但し、この時期上海情報は漢口や長沙に及んでおらず、清国の中の主流ではなかったこともわかる。

## 6. 世界大旅行と東京同文書院

### (1) 世界大旅行

篤麿の実績と明晰さは、多くの指導者に篤麿の登用を着想させた。天皇は篤麿をドイツ全権大使にさせようとし、1898年(明治31年)には組閣した大隈内閣は篤麿の法制局長官に迎える案を出し、天皇はこの案に篤麿が清潔さを保たせる理由で反対している<sup>27</sup>。そんな中で、篤麿は改革途上の学習院から離れることに抵抗し、断り続けていたが、篤麿を巡る人事状況はおさまらず、結局、学習院への復帰を約束にとり、10ヶ月の外遊案を出し、各国を巡る妥協案に落ち着いた。篤麿が育てつつあった学習院との寸時の別れもつらかった心情が伝わってくる。

こうして、学習院の思いを残しながら、1899年(明治32年)4月1日、横浜港からアメリカ船コブチック号でハワイ経由のサンフランシスコへ向かった。図6にそのコース



図6 2回目の世界旅行コース(注1より作成)

を示した。詳細は省くが、ハワイではその地政学的な位置を予見し、アメリカ大陸ではその工業生産の発展ぶりに驚き、日本が参考にすべきとし、その観察力のすぐれた卓見ぶりが伝わってくる。イギリスでは日本協会で演説し、日本の20年間の進歩は外形上だけとし、日本人としての精神を欠いていると演説している。ベルリンでは二人の弟と会い、ライプチヒ大学の懐かしい母校を訪問し、旧交を温めている。あわせてドイツ国会や工場見学も積極的にこなしている。このあと、かつて留学先に推薦されたロシアには1ヶ月間、各地を訪問し、見聞を広め、あと東欧諸国でバルカンの不安定さを実感し、地中海、トルコなどを歴訪し、欧米の旅を終えている。

そして帰路、南アジアの諸港を巡って、嵐にも遭いながら、南清から上海に到着している。

### (2) 両江総督と南京同文書院

1899年(明治32年)10月、上海へ到着した篤麿は南清の重鎮で、南京の総督である劉坤一と武昌の総督張之洞を訪ねている(図7)。両総督とも清国の近代化の推進をめざした洋務派のトップで、日本には同文提携を唱える人物、霞山(篤麿の号)がいるという噂を知っていた。そのため、篤麿の訪問は大歓迎であったという。まず劉総督とは南京の総督衙門で会い、白岩龍平の通訳で会談が進んだ。まずは日清両国の交情を互いに喜び、日本が清国を教導してくれることに総督は感謝し、「もっと人的交流が活発になること」を期待していると。また、篤麿が「西洋列強の野心



図7 近衛篤磨の巡検踏査地とコース(藤田原図)  
(A)は図6の帰路(B)は北清旅行のコースを示す

による甘言でなく、清国の盛衰は日本に密接な関係がある」と説くと、総督は喜び、日清同盟論的な言葉も発したという<sup>28</sup>。

その上で篤磨は、東亜同文会の趣旨を説明し、今時、南京に学校を作る考えを持っているので便宜を図ってもらいたいと申し出ると、総督は東亜同文会のこともすでに知っていて、

「できるだけ協力はしたい」と表明されたという<sup>29</sup>。総督はきわめて友好的であった。こうして、篤磨と対面し直に話し合うことで東亜同文会は南京に学校をつくることが認められた。これが後の南京同文書院としての開校になった。

一方、張之洞総督とは11月1日、武昌の総督衙門を訪ね、会っている。張総督からも歓迎された。張総督はこの年に孫を学習院で受け入れてもらっており、その礼の言葉もあった。篤磨は清国の学生を日本へ送ること、教師を相互に送ることが出来る話をすると、総督は孫を日本へ送っているせいか、また同席者たちも拍手をして同意したという。そしてすぐにでも学生たちを日本へ送りたいという話になった。あと、清国から西太后に追われて日本へ避難した康有為と凌啓超の日本からの他の国への移動や滞在について、二人からは日本政府の扱い方についてかなり意見があったが、篤磨は日本政府の意図ではなく、日本人関係者のすすめや本人の意思だとし、

政治問題認識の違いを示した<sup>30</sup>。篤磨としては両国の間に軋轢が生じないように配慮したものである。

いずれにしても、両総督は篤磨と東亜同文会をかなり好意的にとらえており、とくに劉坤一総督との間で、南京での東亜同文会の学校設立への同意をみたことは大きな成果であった。また張之洞総督から希望のあった清国学生の日本留学にこたえるために、東京で受け入れる学校を早急に用意することが必要になった。いずれも篤磨の指導性が評価されたといえると同時に、新たな課題も抱えることになった。

こうして帰国したあとの日本で、篤磨はまず清国からの留学生を受け入れる学校として、東京同文書院の開校が待たなし案件となり、劉総督と約束した南京での同文書院づくりにも早急に対応しなくてはならなくなった。

## 7. 東京同文書院の開設

張之洞の要望と劉坤一の賛同により、帰国した篤磨は東亜同文会として、東京に清国学生を受け入れる学校を、南京には日本人学生も入れる学校を早急に用意しなくてはならなくなった。

その背景には、日清戦争に敗れた清国で近代化のための人材養成が急務となり、その目が日本へ向けられるようになった。そして日本への留学生が増える気配があり、1899年(明治32年)、前述した張之洞の依頼で篤磨が張の孫の張厚琨の留学先を学習院で受け入れたのは、同会関係者にとって先駆けの経験であった。こうして東亜同文会は清国学生のための進学予備学校として受け入れ施設を待たなしで設ける事になり、同年10月牛込山吹町に東京同文書院を開設した。その際、この事業が同会の方針に合い重要だという判断で、院長に杉浦重剛をあて、その後も同会副会長の長岡護美と細川護成へと有力者でレーしたほどであった。こうして、初年度は



張総督からの派遣生 13 名を受け入れた。その後急増するほかの受入れ校が 1 年間の促成科で学生数を稼いだのに対し、東京同文書院は修業年限を 2 年間とし、落ち着いて教育する方法をとった。担当者は教師 4 名と監督が一人の 5 名、日本語の文法、会話、読本、語法と理科学、英文、数学、翻訳、歴史、地理、筆記などが科目として講じられた<sup>31</sup>。

しかし、清国を巡る内外の緊張は次々と学生に影響し、せっかくスタートした東京同文書院生は 1900 年 (明治 33 年) に生じた北清事変のため、全員が帰国してしまった。そんな中、同事変で日本軍がすばやくほかの列強による破壊から清を守ったこともあり、新入学生が 4 人入学、翌年は 20 人、その翌年は 50 人が入学するようになり、教師も 7 人に増えた。校舎も神田錦町へ移転し、1 月 19 日の開院式には 50 人も多数の来賓を招き、篤磨が「東亜同文会は清韓西国の誘導開発を目的とし、本院は清国学生に相当の便宜と監督を与えて誘導し、今後他校と共に学生教育の発展を期す」とあいさつしている<sup>32</sup>。篤磨の姿勢が東京同文書院にそのまま反映していることがわかる。

しかし、今度は清国内の政変の影響か、清国公使は武術もおこなう成城学院からの進学保証を拒否したために、清国の学生間に動揺が走ったが、長岡東亜同文会副会長の調整により、東京同文書院、嘉納治五郎が創設した弘文学院、そして清華学校の 3 校が代わりに外務省へ保証申請することで成城の学生も官立学校へ進学できるようになった。混乱を収束させたのは東亜同文会の指導によるものであった。

その後、1903 年 (明治 36 年) には東京同文書院の学生が 117 名に増え、後に清国で活躍する卒業生も輩出し、清国の官吏登用試験で、狭き門の科举制度に 13 人、17 人と毎年合格者を出したりした。1904 年には目白台へ校舎を移転、学生 132 名、出身省も清国の全

土に広がった。このあとさらに活躍する柏原文太郎が初代副院長になっている<sup>33</sup>。

ところで、この時期、東京同文書院での清国からの留学生への教育に関して、篤磨は誠実に本気度を示して、清国から留学生を送ってきた両江総督に対して、その責任を果たす対応を示した。

その一例が優れた教師陣を用意したことであった。その教師陣は日本でもトップレベルにあった<sup>34</sup>。たとえば、日語辞典類を出版し、留学生用の語学教育の第一人者の金井保三、『広辞苑』編集の新村出、日本中学校校長で昭和天皇の皇太子時代に進講したことのある猪狩又蔵、中央大学の前身である英吉利法律学校で有名になった杉村広太郎、名著『化学本論』で知られる片山正夫、熱田と檀原両神社の宮司をつとめた神主の副島知一、英文学者の前田元敏、孫文を支援した宮崎滔天の兄で孫文と親交のあった宮崎寅蔵、東京美術学校教授になる小林萬吾、国語学の大家である亀田次郎、そしてこよなく東京同文書院と留学生を愛し、世話した柏原文太郎夫など、まさにキラ星のごとき教師陣であった。



写5 1914年の東京同文書院・全学生写真  
(注34より)

その後、清国からの留学生熱はさらに高まり、清国がほかの留学生受入れ学校の短期速成コースを嫌い、東京同文書院への入学を奨励したほか、折から日露戦争に日本が勝利したため、一段と留学生が増えた。東京神田一帯に 1 万人ほどの清国学生があふれたという。そこで校舎拡張が問題になり、1905 年 (明治

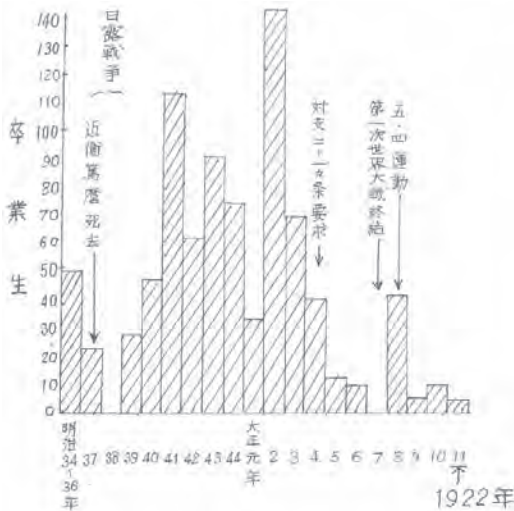


図8 東京同文書院年次別卒業生の数の推移

38年)、北多摩郡落合村に500名収容の新キャンパスを建設し、ほかの予備学校も増えて13校を数えたという。そのような中、文部省による清国学生への監視のチェックで同盟休校があったが、これも東亜同文会会長青木周蔵らが調停役を果たしている。また多様な専攻も用意され、留学目的の学生の幅が広がった<sup>35</sup>が、1911年辛亥革命が起きると多数の学生が帰国し、ほかの多くの予備校が閉鎖されたりした。それでも東京同文書院は存続し、1914年には開学以来の入学生は3,000人を超えた<sup>36</sup>。

しかし、1915年(大正4年)、日本の大隈重信内閣から民国側へ21箇条条約が出されると、東京同文書院の学生からも帰国者が出て、留学生が32人にまで減少、さらに五・四運動もあって20人台の留学生となり、1922年(大正11年)、ついに東京同文書院は閉鎖された<sup>37</sup>。その代わり、後半の頃からは、減っていく清国学生に入れ替わるように、ベトナム学生が祖国の独立を胸に抱き、入学してきた。彼らの世話もした柏原文太郎夫妻は「日本の父、母」と慕われた。やがてベトナム独立運動をファンボーイチャウが指導力を発揮すると、宗主国フランスから日本政府に圧力がかかり、しかも日仏政府間の政治的取引もあ

って、彼らの夢は泡と消えた<sup>36</sup>。しかし、戦後独立したベトナム政府からは独立に大きく貢献したとして東京同文書院や財政を支えた浅羽佐喜太郎に光が当てられている<sup>38</sup>。

ところで、篤磨は1904年(明治37年)に亡くなっている。42歳という若さであった。しかし、それにめげず後継者たちは篤磨の路線を引き継ぎ、大いに努力した。もし、篤磨がもう10年でも生きていたら、日本政府は21箇条条約などを請求しなかったことであろうし、東京同文書院はより多様に発展したであろう。

## 8. 南京同文書院から東亜同文書院へ

### (1) 南京同文書院の開設と閉校

一方、南京の劉坤一から賛同された南京での学校づくりはどう進んだのか。

南京から帰国した篤磨は、すぐに東亜同文会幹事である佐々木四方志を南京に派遣。佐々木はそれより前に東亜同文会が上海に派遣していた留学生曾根原千代三を伴い、南京で総督の部下で洋務局の汪嘉棠と学堂建設の相談に入り、妙相庵を校舎として借り入れることになった。また寄宿舎は劉公館に決まった。篤磨が去ってわずか1ヶ月後の事である。

早速、学生募集を進めることになり、各府県から公費により募集することになり、篤磨の名義で各府県の知事と議会議長に応募依頼状を送付したが、ほとんどの府県は府県議会が終了したあとで、応じたのは、広島、佐賀、熊本の3県のみであった。そこでこれより前に東亜同文書院から上海へ派遣していた学生、農商務省からの実習生、自費生、南京本願寺留学生などを加え、総勢20人あまりの学生が第1期生となった。また城内には30人ほどの清国人学生が南京同文書院の分院として設けられ、日清の両学生の教育が始まることになった。院長は東亜同文書院幹事長で陸軍退役少将の熱心な佐藤正が予定されたが、佐藤の健康、そのほかの都合により、代わりに



写6 南京同文書院の学生たち (明治33年)  
(注39より)

根津一が初代同委員長に就任し、1900年(明治33年)5月12日、現地での南京同文書院としての開院式が行われた。

しかし、義和団の乱の勢力が南京にも迫ってきて、劉総督も避難を勧めたこと、また孫文の革命運動に前述の幹事佐々木や教師の山田良正が加わり、篤麿など書院からの制止にもかかわらず山田良正が蜂起に加わり戦死したことで、学堂全体が落ち着かなくなったこともあって、同年8月上海イギリス租界のうちの競馬場近くに移転した。そのさい根津はかねてより大規模な将来の学院計画を抱いており、新たに東亜同文書院として上海で学堂を実現することを決意し<sup>39</sup>、上海城南郊外の高昌廟桂墅里に校舎を求めた。その際、南京の清国学生の分院は廃止し、学生の一部はこの校舎に入学させた。こうして南京同文書院が東亜同文会を母体とした東亜同文書院として誕生したのである。1901年(明治34年)5月のことであった。

こうして、南京同文書院は東亜同文会の清国での初の教育事業として篤麿はじめ関係者の努力で実現したものの、その存続期間は上海への移転期間も含めて1年、南京ではわずか3ヶ月の存在であった。体制を組み始めたところで終了せざるを得なかった。しかし、清国での貴重な経験にはなった。そしてこのことが、次の根津による新たな学校である東亜同文書院を生むことになった。

(2) 東亜同文書院への展開。

### ① 東亜同文書院の開院

根津院長は、南京同文書院が移転した競馬場東の小さな小路の奥の借家の校舎に限界を感じたのであろう。この移転を自らのかねてからの日清貿易研究所の経験を踏まえ、京都での隠棲中から検討していた上海での理想的な書院構想を実現するチャンスに変えた。篤麿や劉総督の承諾も得て移転し、前述の上海城南郊の高昌廟の一角にある複数の建物を借用できた。義和団の乱が1900年(明治33年)12月に収束すると、すぐ日本で南京同文書院の公費による新規入学生の募集をメンバー5人による全国遊説により始め、府県費入学生51名、私費4名の合計56名が入学を希望した<sup>40</sup>。入学者は18歳から25歳と年齢差があり、社会経験も多様な学生たちであった。

こうして1901年(明治34年)4月30日、第1回の入学式が東京の華族会館で行われた。篤麿はそこで東亜同文書院設立の趣旨とともに学生の心構えについて、学問を中途半端にするような意思の弱さのないように、また、日本人としての名誉を失わないように、そして客気に走って無謀な行いをしないように、最後に衛生に注意し、身体を害することのないように、などの点について訓示をした<sup>41</sup>。そこには学習院の生徒に対してと同様な学生を思う気持ちが述べられている。篤麿にとって、南京同文書院の轍を踏まず、清国での本格的ないわば国際的な日本人教育への大きな



写7 東亜同文書院開院式・桂墅里校舎 (明治34年5月26日)  
(注39より)



期待があったといえる。根津院長ももちろん同様で、それに精神教育についての教訓を加えた<sup>42</sup>。そのあと東京で帝国大学や造船所、大阪で新聞社や大阪城、工廠、商品陳列所などを見学させ、宿は一流の旅館に泊め、神戸から上海へ向かった。この方式はその後日本での書院入学式の伝統となった<sup>42</sup>。そこには篤磨と根津が地方出身者の多い新入生に対する日本のレベルを知らしめ、上海という国際都市への船出に対する新入生への配慮があったといえる。

そして5月26日には高昌廟桂墅里の新しい校舎で開院式が行われた。東亜同文会本部からは長岡護美副会長、上海からは小田切上海総領事他、清国からは劉と張の総督代理である上海道台の袁、上海知県の劉、南洋大学（のちの上海交通大学）を創設した盛宣懷、英国高等裁判所長ウィルキンソンなど、内外から数百人が集まり盛大であった（写真7）。長岡副会長は、本部への報告の中で、内外の期待に答え、書院に対する危惧や誤解を払拭し、商務と政治方面に独立活歩の新人物を養成することが書院の責任であり、公明正大、大道を闊歩出来るような20世紀に適應できる施設を整備すべきこと、また、梁山泊風の豪傑養成の学校にならない事を常に留意すべきこと、と記したという<sup>43</sup>。

## ② 設立趣旨

東亜同文書院の開院に当たり、建学精神の「興学要旨」と、教育方針である「立教要旨」が漢文で示された。前者は、簡潔に言えば、広く実学を教授し、両国の英才を教育し、清国の富強の基礎を作り、両国の提携の根を固め、清国の保全、さらには東亜の安定をめざすという内容であり、後者も簡潔に言えば、教育方法としては、儒学をベースにして、倫理道德教育を重んじ、清国学生には日本の言語と文章、西洋の百科実用の学を教授し、日本の学生には清語および英語とその文章、法律制度、商工業実務を習得させ、必需の人材

表1 <学科科目>

行政	商法	刑法	民法	憲法	法學通論	清國商業地理	清國政治地理	英語	清語	倫理	政治科
經濟學	國際政策	國策	商法	民法	法學通論	清國商業地理	清國政治地理	英語	清語	倫理	商務科
○實地修學旅行	○漢文尺牘	○漢字新聞	漢文	近代政治史	○清國近時外交史	○清國制度律令	○經濟學	○國際私法	○國際公法		政治科
○實地修學旅行	○漢文尺牘	○漢字新聞	簿記	商業算術	清國商業學	清國商品學	○清國制度律令	清國近代通商史	○財政學		商務科

(○は共通科目) (注 39より)

（○は共通科目）（注39より）

となることをめざす、という内容である。とくに根津院長の日清貿易研究所の経験とその後の京都での隠棲中に習得した儒学と修禪から会得した倫理は、学生たちが卒業後に従事するであろう日清間の貿易業など起業家を目指すさいに、自己の利益だけを荒く追求するのを避け、相互の発展が可能になるような方途を求めるという人格形成の原則を理解させようとしたものであった。そのあとの授業では必修の「倫理」を退職時まで継続し、書院の神様とまで言われ、在校生、卒業生から慕われていく事になる。これは、マックスウェーバーが「プロテスタンティズムと資本主義」でヨーロッパにおける制限なしの資本主義の展開に宗教的倫理観を導入した論のアジア版ということも出来、マックスウェーバーに匹敵する根津の教育的、経世的な独創性であったといえる。そして実際、この教育は卒業生の中から多く誕生した起業家、経営者の価値

観や行動の中に影響が見られることになる。

こうして 1890 年（明治 23 年）に荒尾が切り開いた日清貿易研究所、1900 年（明治 33 年）に篤麿が切り開き根津が運営に関わった南京同文書院、そして 1901 年（明治 34 年）にそれらを踏まえ、東亜同文会会長の篤麿と院長に就任した根津によって、ここに新たに東亜同文書院がスタートするに至った。ただし、正式には「東亜同文書院」へ解消されたのは、同年 8 月の事であった。入学生はここで正式に「東亜同文書院生」になった<sup>44</sup>。

### ③ 学科とカリキュラム

東亜同文書院の学科は、政治科と商務科で、商務科学生が大半を占め、末期には政治科が廃止される事になる。また、当初の学科科目は表 1 に示すとおりで、授業時数から言えば清語が週 12 時間、英語が週 6～8 時間とまず語学の習得が徹底された。これは貿易実務者にせよ、ほかの業にせよ、清国で就業し活動するには欧米列強のように買弁を使わず、自ら清国の生産者や商人と対等に取引が出来る清語のレベルを習得しようという目標があったためである。教科書もそののち書院独自の『華語萃編』が日本人向けに初めての清語教科書として第 4 輯まで作成された<sup>45</sup>。教科書の内容は幅広く、歴史的な名文も収録されたが、貿易、商取引の実務、つまりビジネス清語に関する文言が多くを占めた。当時は清語文法がまだなく、そのため文章を丸暗記する学習法であった。とくに新入生に対する発音訓練は「念書」として同県出身の 2 年生が新入生に責任を持って教え、その練習の声がまるでカラスのようだと、地元住民から「カラス学校」と称されるほどであった。そのおかげでより実践的に清語を習得でき、書院生の発音の良さは定評を得ていくことになっていく。

政治科の授業科目を見ると、法律の分野が多くを占め、法科といってもいいほどの内容である。ここにもビジネス世界での活躍が期

待される書院生用のカリキュラムで、しかもそれらは商務科との共通科目になっている。商務科の学生にとっても有用な科目が並んでいるといえる。

一方、商務科の科目を見ると、その内容は商業地理、商品学、商法、商業学、簿記、清国商品学、通商史、制度史、商業算術など、ほとんどが商取引にかかわる実践的な科目に特化している。現代風に言えば、まさにビジネススクールとしての科目といえる。

ところで、指導者になった根津一は、荒尾精の薫陶を受けていた。すなわち、荒尾の構想した日清間での貿易を発展させることにより、両国の経済を発展させ、それが両国の欧米列強への対抗力になるという東アジア構想に陸軍大学校時代の親友として傾倒していたこと、そしてさらに荒尾が清国へ渡ったあとに岸田吟香の援助を受けて日本から流れてきた若者と漢口を拠点に商取引を中心に集めた情報を元に、荒尾の意を汲んで根津が『清国通商綜覧』<sup>46</sup>という清国の実体を初めて日本人に伝えた本として編集し出版した事であった。荒尾の目的は清国の実体を紹介したこともその功績は大きい、より中心的には清国の商取引慣習や商業の実体を明らかにし、優れて貿易品になる多くのすぐれた清国商品をカタログ的に示し、日本人が清国商人と取引できる環境づくりを行ったことに大きな価値があった。清国の伝統的な商慣習は簡単ではなかったからである。それを解き明かし、商取引の注意点まで示した荒尾の情報は、その後の日本の商社、商人にとっても画期的であり、荒尾の東アジア構想を実現する具体的な方法であった。そして当時の日本の欧米志向に対して、まさに隣国に大きな貿易相手国があることをアピールしたのである。

不幸にも彼は希望したにもかかわらず、軍籍を脱せず清国入りしたため、のちに、いや今も一部の日本人研究者から近視眼的に日本のスパイとされる事になったが、荒尾の真意

はこの書に集約され、もっと深く大きく東アジアの経済発展の構想を持っていたことは評価されるべきであろう。荒尾が上海に日清間の貿易ビジネスマン育成のために、日清貿易研究所を財政的危機の中でも立ち上げた事、そしてそこに商品陳列所を学生実習用に設けたことにも表われている。商品陳列所は日本では明治後半から大正期に各府県単位で設けられていく事からすれば<sup>47</sup>、荒尾のそれはきわめて先駆的であり、しかも外地の清国で商品を取り扱い、商品陳列所を設けたことは、紛れもなく貿易実務者を養成しようとする荒尾の強い願いが込められていたといえる。卒業直後に日清戦争がなければ、卒業生たちの多くがビジネス界で成功した白岩龍平のように日清間の架け橋になるようなビジネス事業を試みたに違いない。

根津はこのような荒尾の東アジアでの貿易発展構想とその実践の試みを十分に理解しており、新生東亜同文書院の設立にはビジネススクールとしての性格を当然のように組み込んでいた。荒尾、そして根津のこのような取り組みに対して荒尾をスパイ視するというのは一方的であり、そのような荒尾がたどり着いた構想の観点から再評価がなされるべきであろう。

#### ④「大調査旅行」の誕生と展開

そしてカリキュラムの中のもう一つの大きな特徴は、政治科、商務科共に「実地修学旅行」という科目が設けられていることである。これは清国へ来た学生が清国を見学するという趣旨で設けられたもので、かつて荒尾の上海、漢口などでの清国観察、近衛のヨーロッパ留学と北海道巡検<sup>47</sup>、そして米欧の旅から劉、張総督を訪問した清国への旅、根津の北清巡検など、指導者の海外経験を背景にしながら、学生に清国を見せたいという目的の科目が設けられた。のちに書院の「大旅行」は有名になるが、しかし、開学当時の書院は財政事情が厳しく、新入生には杭州方面の小旅



図9 第5期～第23期のコース図(実線)  
(藤田原図)

行と上級生の主要都市を巡る修学旅行という形でしか実現出来なかった。その中で修学旅行は学生をいくつかの班に分け、各年森茂教授や西本、白川教授が交代で指導引率し、北清、京津、漢口などを巡った。そのさい、学生をいくつかの班に分け、商業慣習、流通、工業、経済組織などについて調査をおこない、その調査報告は学生の作品とはいえ、初の本格的調査報告として評価され、『支那経済全書』全12巻(1908～1909)として丸善から刊行<sup>48</sup>、公表された。

そんな折、1902年(明治35年)に日英同盟が結ばれると、イギリスは清国西部新疆地域へのロシア勢力の浸透状況報告を日本政府に要求してきた。日本政府はその調査手段を持たなかったため、書院の根津院長に依頼、卒業直後の2期生5人の了解を得て現地へ派遣、日露戦争の最中、途中の熱病などで死ぬ思いをしながら往復2カ年をかけて目的を達成し、徒歩で帰還した。そんな大旅行を在校生も願ったが、財政難の書院側はそれに答え



られなかった。ところが外務省がその謝礼に 3 万円を書院へ渡したことから、それで修学旅行に代わる学生中心の大旅行を 3 年間実施することが出来ることになり、5 期生からスタート (1907) した。学生たちは自分たちで調査目的地を決め、コースも決めて、3~6 ヶ月の徒歩による大調査旅行を実施した。その成果はすべて日本人のみならず、清国人にとっても初の成果であり、書院当局は 3 年間の予定をさらに延ばし、書院の優先的行事となった。こうして 20 世紀前半の半世紀、満州や東南アジアも含め、約 700 コースの調査旅行が発展的に行われ、調査報告はそれぞれの学生の卒業論文となり、それらの成果は『支那省別全誌』<sup>49</sup>として刊行され公表された。戦争で中断したが新修版も 9 巻まで公表された<sup>50</sup>。学生の作品とはいえ、全国から公費生として選抜された優れた学生のその作品は今日の学生の作品とは比較にならないほど優れており、今、中国は自国の歴史的空白を埋めるべく、書院生のこれらの作品を相次いで出版している。

調査報告の内容は全体を通じて、貿易、商業システム、金融、産業、交通、都市などやはりビジネスに関わるテーマが中心だが、後半からは、教育や文化、災害、地方制度などへも広がり、いわば中国の総合研究に向かっている。それが 1939 年 (昭和 14 年)、「東亜同文書院」から「東亜同文書院大学」への昇格となった。書院が設立されてから 39 年目の事である。1937 年以降は日中戦争の時代に入り、外的環境の変化に中で揺れた面もあったが、その基本姿勢は篤麿以来の伝統が継承された。そして、それは戦後、最後の「東亜同文書院大学」の院長であり、学長であった本間喜一が愛知大学を設立継承した。

## 9. まとめ

以上、教育者としての近衛篤麿をその経歴を追いながら検討した。内容の繰り返しは避

けたいが、全体としてみると篤麿は明治時代の前半期、明治維新後の日本がまだ混沌とし、体制が出来はじめつつある試行錯誤の時期に、幼少期を迎え、青年期、そして壮年期を迎え、さらに成熟が期待され始めたときに、難病により寿命を終えた。42 歳という若さであった。しかし、短い間とはいえ、きわめてアクティブな人生を送り、貴族院をベースに、藩閥政治と政党政治に客観的な距離も置きつつ、国内政治をリードし、かつ調整した一方、日清戦争後に清国とのトップ会談の出来る国際政治家として、さらにヨーロッパへの留学や、各国訪問の経験により、国際的視点からの日露戦争への戦略を展望することができた、ある意味では時代が生んだ優れた指導者であった。

なかでも教育に深く関わった点が、篤麿の大きな特徴の一つにあげられるであろう。貴族の門地に生まれ育って、幼少期から漢学、馬術などを修め、11 歳の時に父親がなくなると、端正な祖父に育てられ、多くの実践的な修業を受け、学校も上京が重なり、小学校へ少し通学しただけであった。その代わり鯨島塾で英語を学び、あとは独学で学び、学校制度には縛られない生活と勉学をした。塾では授業前に教師と相撲を取り、体が出来たなど、すでに多くの専門分野の師匠や教師から教育を受ける経験を持った。知的好奇心はきわめて旺盛で、残された『蛭雪余聞』はその一端を示している。そして英語力を得て留学を目指すという進取な態度は、ドイツ語圏への留学となったが、ドイツ語を現地で修得し、ドイツでの学位まで取得する力になった。

それが日本でも評価され期待され、帰国するやすぐに貴族院議員、学習院長ほかの要職に就任した。篤麿は藩閥政治と政党政治に不信任を持って距離を置き、国のリードはヨーロッパ諸国のように貴族が行うべきだという考えを持っていた。そのため、学習院長になると貴族教育に取り組んだ。これが教育への

初めてのアクティブな取り組みになった。当時評判の悪かった学習院生徒の指導改革や管理法の制定、リーダーとしての活躍をすべく外務省への入省を実現するための大学科の設置などを進め、卒業後の出口まで幅広く配慮している。

その改革の最中、世界一周の旅に出され、ロシアを含むヨーロッパからのアジアへの視点を習得し、ロシアの東アジアへの進出の基本戦略を知る一方、併せてロシアや欧米列強に狙われている清国の弱さを改めて知り、その解決法を日清の共同での学校づくりという形で清国の両江総督たちへ提案した。それはちょうど赴任前の学習院の弱体を前にして、いかにそれを改革するかという姿勢と共通するところがあり、学習院での経験から生まれたともいえる。日清戦争直後であったため、清国側は日本の近代化に学ぼうと賛成し、すぐ日本へも学生を送りたいということになった。その点では学習院改革の場合も、より進んでいたドイツで学んだ篤麿に改革への期待感を持ったと言うことが出来る。

こうして実現した南京同文書院は、その直後、義和団の乱によって上海への移動を余儀なくされ、それは篤麿が認めた根津による貿易実務に特化した国際ビジネススクールというにふさわしい上海に設立した東亜同文書院へと発展することになった。一方、清国から日本への留学生は東京同文書院の開設で受け入れ、篤麿も支援した。そのさい次々と押しかけてくる清国留学生を1年間の促成科で対応する学校が多くなった中、東京同文書院は2年間のコースにこだわり、最後までそれを貫いた。しかも当時の第一線の優れた日本人の著名な教師たちを採用し、学生を指導し、学生には落ち着いて勉強させた。そのせいか、上級学校への進学者も多く、また、年によっては科举制度が廃止される前の時期に、合格者を年に13~17人も輩出した。このような対応は、清国の劉両江総督唐以来された留学

生への国際的な責任と信頼をとるという篤麿の姿勢が表れていたと言うことが出来る。それはそれより前の義和団の乱の時の日本軍の北京城内での行動に対する総督への対応の説明と納得にも現れており、それが東京同文書院の運営にも現れていたと見る事が出来る。

このように篤麿が内外の経験を踏まえ、篤麿が国際人として責任を持ちながら教育への対応をしたといえ、それはその後の東亜同文書院の教育あり方にも反映したと思われる。

## 10. おわりに

以上、篤麿の42歳という短い人生の中で果した教育者としての教育とのかかわりを見てきた。近代日本の幕開けとともに始まった篤麿の人生は、当初、その生まれながらの名門の門地を生かされる形の修行の中で成長し、学校教育の外側にあったがゆえに、自らの関心と才能を発揮して、広く知識を求めるといったポジティブな性格を形成させた。そしてさらに自ら行動し、実践するという成長発展の過程の中で、まだ開国間もない日本から世界へ飛び立ち、ドイツでは自力で学位をとるなど、グローバルな世界を自ら切り開いたという点に、明治期が生んだ人物の中でも特筆される存在といえる。篤麿が果した役割は多岐にわたるが、それらが相互に関連した形で展開し、篤麿の中では全体の統一がとれていたであろう。

そのような中でも藩閥政治と政党政治には不信感を持ち距離を置いたが、特に藩閥政治への距離間は少年期の京都における長州藩などによる天皇や御所焼き討ちなどの暴力を目の当たりにした経験がその根底にあると思われる。その距離間が物事を客観視するようになり、新たに登場した政党政治にも不信感が向けられたと思われる。そのような政治の世界に対する価値観の中で、ヨーロッパ留学中、各国の王族の指導力を見聞し、日本でも貴族こそが政治の中心でリードしなくてはならな

いという信念を持ったのであろう。

しかし、ヨーロッパ留学時代、目指したボン大学は貴族層出身の学生たちが、勉学に怠惰であったことを知り、ライプチヒ大学へ移っている。そこから、篤麿の信念からすれば、貴族としてあるべき姿を身につけるには早期の幼少期からの教育が必要だ、という信念を持ったことであろう。そこには自らが生かされた修行の時代の経験を思い起こさせたに違いない。

したがって、期待されて帰国した日本では、ズバリ貴族院の中樞の議長に就任し、政治の世界へ入ると同時に、学習院長になって覇気のない学習院生徒たちの改革に着手できるという、教育面での願ってもないチャンスを得たのである。そしてここから、それまで受け手であった教育を今度は施す側の主体に立場を変えることになった。

そして貴族院という政治世界の真ただ中にあって、学習院改革をかかげ教育問題を正面から対峙することになり、篤麿にとって、政治と教育は切り離せない形でスタートをきったのである。学習院改革では、ドイツのライプチヒ大学でのゼミ制度により自由に研究出来、しかも専門領域を自由に超えられる大学の仕組みの先進性に魅力を感じ、卒論ではその自由度の先に、観念論が主流のドイツでもまだ一般的ではなかった実証研究的な方法でアプローチをしている。学習院では大学科の設置を行い、ドイツ流の幅広い学問領域を立案し、卒業生には外務省などへの道を開き、ゼミ的な茶話会も催したという。まだ誕生したばかりの京都帝国大学では、東京帝国大学の官吏養成指向の教育だけの方向に対して、高根総長の研究型大学構想への方向を支援している。それらの構想と実践はその後、篤麿の死や高根の退職によって学習院、京都帝国大学とも後退するが、日本の大学のあり方について、教育に関心を持った政治家が誕生したことには大きな意味があったように思われ

る。また、篤麿は学習院だけでなく、当時の日本における不就学児童の存在とその課題を知り、その解決方法についても視点を広げ、国全体の教育問題にも関心を持った。

篤麿のグローバルな視点により、日清戦争のあと、それまでの欧米指向の中にアジア指向の団体が生まれ始めた。その中で自らも東亜同文会を誕生させ、自ら会長に就任した。その視点は、当初は朝鮮を中心にした教育の普及向上活動であったが、次いで清国での教育への危機感に対応した教育文化交流事業へ展開した。留学生を東京に受け入れるために東京同文書院を設け、日清両国の学生を共に学ばせる構想でスタートした南京同文書院、それから発展した東亜同文書院は荒尾の構想も取り込み、清国を舞台にしたグローバルなビジネススクールとして発足し、大いに発展することになった。卒業生の中には清国、次いで民国で起業するものはもちろん、多方面でも活躍した。戦後の日本での高度経済成長を支えたのは、紛れもなくグローバルなセンスを持った彼らの力が大きい<sup>51</sup>。

この背景には、篤麿が国内は元より、当時、とくに清国の指導者たちと強い信頼を築き、交流を活発に進めていたことがある。李廷江は篤麿の日記や多くの私信の研究を通してそのことを明らかにした<sup>52</sup>。そこから自由度の高い国際交流を進めたことがわかる。「篤麿日記」にもそれらを物語る記録が見られる。国家間の指導者間の信頼関係こそが、国際交流、とりわけ教育交流をすすめる上で重要であることを証明したといえる。

このように、篤麿は開国間もない明治時代前半期にあって、自ら育てられた中での自学の経験と、教育された英語を軸に、ドイツでの先進的教育を受ける機会を得、学習院での教育改革の実践に続いて、東アジアと教育を介して初めての交流を図った開明的でグローバルな観点を持つ近代日本の教育者であり、教育事業の先駆者であったといえる。



それを可能にした条件には、生きた時代の環境や自身の門地、使命感などもあり、一般化は難しいが、今日の教育、とくにグローバリ化のなかの教育のあり方には多くのヒントを与えてくれるように思われる。

- <sup>1</sup> 工藤武重(1938)『近衛篤磨公』、大日社、395 頁。
- <sup>2</sup> 近衛篤磨日記刊行会(1968)『近衛篤磨日記』第 1～5 巻、付属文書、鹿島研究所出版会。
- <sup>3</sup> 前掲①、1 頁。
- <sup>4</sup> 前掲①、2 頁。
- <sup>5</sup> 前掲①、5～6 頁。
- <sup>6</sup> 前掲②、随所にあり。
- <sup>7</sup> 水谷川忠麻呂編(1939)近衛篤磨の『蛩雪余聞』、全 3 巻。陽明文庫。
- <sup>8</sup> Atsumaro Konoye (1890)
- <sup>9</sup> Die Ministerverantwortlichkeit nach der japanischen Verfassung. Leipzig 大学卒業論文。
- <sup>10</sup> 前掲①、14 頁。
- <sup>11</sup> 前掲①、18 頁。
- <sup>12</sup> 前掲①、20-21 頁。
- <sup>13</sup> 前掲①、31-32 頁。
- <sup>14</sup> 前掲⑧、14 頁。
- <sup>15</sup> 前掲① 14 頁。
- <sup>16</sup> 近衛篤磨 (1896)「学習院制度改革意見」、『近衛篤磨日記』付属文書、1968、59-60 頁。
- <sup>17</sup> 前掲②、第 1 巻、80 頁。
- <sup>18</sup> 前掲②、第 1 巻、82 頁。
- <sup>19</sup> 前掲②、第 1 巻、82-83 頁。
- <sup>20</sup> 前掲②、第 1 巻、303-305 頁。
- <sup>21</sup> 前掲②、第 1 巻、316-317 頁。
- <sup>22</sup> 相原茂樹(1999)「近衛篤磨と京都帝国大学」、『史』、No.99、41-48 頁。  
しかし、篤磨の死で篤磨が設けた大学科は廃止され、京都帝国大学も高値の退職で改革は水泡となった(前掲②による)。
- <sup>23</sup> 日清貿易研究所編輯 (1892)『清国通商綜覧』、全 3 巻、丸善。
- <sup>24</sup> 荒尾精 (1894)『対清意見』、博文館、106 頁。

それだけに篤磨が、そして彼の先駆を走っていた荒尾がもう 10 年長く生きていたならば、今日の我々や東アジアがどんな世界になっていたかを想像するのも無駄ではないであろう。

- 荒尾精 (1895)『対清弁妄』、大谷仁兵衛ほか、96 頁。
- <sup>25</sup> 藤田佳久 (2012)、『『東亜同文会報告』開設』、『東亜同文会報告』第 26 巻、ゆまに書房、395-419 頁。
- 藤田佳久 (2013)、『20 世紀初期の東亜同文会の東アジアを巡るネットワークー『東亜同文会報告』からー』、『同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院記念センター) Vol.21、108-115 頁。
- <sup>26</sup> 前掲②。
- <sup>27</sup> 前掲①、225-227 頁。
- <sup>28</sup> 前掲①、251-252 頁。
- <sup>29</sup> 前掲①、253-254 頁。
- <sup>30</sup> 前掲①、255-260 頁。
- <sup>31</sup> 東亜文化研究所 (1988)『東亜同文会史』、霞山会、74 頁。
- <sup>32</sup> 前掲③、75 頁。
- <sup>33</sup> 前掲③、75 頁。
- <sup>34</sup> 保坂治郎 (2010)「目白にあった東京同文書院」、『同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院記念センター)、Vol.17、42-81 頁。
- <sup>35</sup> 馬場毅 (2013)「東京同文書院について」『近代台湾の経済社会の変遷』所収、東方書店、3-29 頁。
- <sup>36</sup> 前掲③、77 頁。
- <sup>37</sup> 前掲③、82 頁。
- <sup>38</sup> 藤田佳久 (2012)『日中に懸ける一東亜同文書院の群像一』、中日新聞社、53-56 頁。
- <sup>39</sup> 大学史編纂委員会 (1982)『東亜同文書院大学史』、渥友会、82-83 頁。
- <sup>40</sup> 前掲③、86 頁。
- <sup>41</sup> 前掲③、86 頁。
- <sup>42</sup> 前掲③、87 頁。
- <sup>43</sup> 前掲③、88 頁。
- <sup>44</sup> 前掲③、87 頁。

- 
- <sup>45</sup> 次の論文に詳しい。石田卓生 (2016)「東亜同文書院の中国語文章語教育について—愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵テキストを中心に—」、『同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院記念センター)、Vol.24、119-142 頁。
- <sup>46</sup> 前掲③。
- <sup>47</sup> 加治由行 (2000)「物産・商品陳列所についての一考察」、全国大学博物館学講座協議会『研究紀要』、第 6 号、59-66 頁。
- <sup>48</sup> 根岸侑編(1907～1908)『支那経済全書』全 12 巻 東亜同文会。
- <sup>49</sup> 東亜同文会 (1917～1920)『支那省別全誌』、全 18 巻、東亜同文会。
- <sup>50</sup> 東亜同文会 (1941～1944)『新修支那省別全誌』、9 巻で戦時により刊行中止。
- <sup>51</sup> 藤田佳久 (2017)「東亜同文書院・同大学卒業生の軌跡と戦後日本の経済発展」、『同文書院記念報』

Vol.25、別冊②、45-63。

- <sup>52</sup> 李廷江 (2008)「近衛篤磨と清末中国」、『オープン・リサーチ・センター年報』(愛知大学東亜同文書院記念センター) 331-349 頁。

[付記]

本稿は霞山会等主催「Think Asia—アジア理解講座」シンポジウム『歴史に学ぶ 明治期アジアへのまなざし—より良き関係を目指して—』(2017 年 12 月 10 日、於、立命館アジア太平洋大学)での講演「東亜同文会—教育者としての近衛篤磨—」の発表を骨子とし、そのさい、刊行された同上シンポジウムの掲載原稿を、当センターの本年報にふさわしい内容として転載したものである。転載をお認めいただいた霞山会に謝意を表したい。